地域と認知症フォーラムＩＮ御坊

住み慣れたまちで安心して暮らしたい

基調講演「認知症とともに‥これからの生き方　支えあい方」

認知症介護研究・研修東京センター研究部長　永田 久美子さん

高齢化社会・長寿社会が進展する中で、いま認知症問題がクローズアップされています。認知症１０００万人といわれる時代、だれでもなり得る可能性がある認知症に私たちはどう向き合うのか。和歌山県地域・自治体問題研究所では、本人・家族・地域住民と行政が一緒になってすぐれた取り組みを展開している御坊市に学ぼうと、６月17日（土曜日）御坊市中央公民館を会場に地域と認知症フォーラム「住み慣れたまちで安心して暮らしたい～認知症の理解を深め支えあう地域づくりを～」を開催しました。第一部は認知症介護研究・研修東京センター研究部長永田久美子さんによる基調講演「認知症とともに：これからの生き方　支えあい方」、第２部では和歌山大学経済学部准教授金川めぐみさんをコーディネーターにパネルディスカッションが行われました。「わかやま住民と自治」７月・８月合併号では、このフォーラムを特集します。

永田久美子さん

認知症の生き方に変化　希望をもって生きる

皆さん、こんにちは。永田といいます。今、全国の自治体が認知症について活発に取り組みを展開しています。認知症問題は、これまで福祉や介護、医療のサービス、どう支援するのかという提供型の考え方が主だったんではないかと思います。しかし、実はこの10年、認知症になってからの生き方というのは、ものすごく大きく変わりました。今日認知症になってどんな生き方が今できるようになっているのか、そしてそれを一部の地域だけでできればいいのではなくて、どこのまちに住んでいても、認知症になっても、こんな生き方ができたらいいなあと、認知症になっても、明るいビジョンをみんながちゃんと描けて、それを保障するための支え方をどうつくっていったらいいのか、そうしたことをお話し、参考にしていただければと思います。

認知症の人は、65歳以上の人が２０１５年推計値で５２０万人、実質の数はもっと多い。10年後、団塊の世代の方たちが認知症の好発年齢になってきます、そういう時代に、認知症の人の数はもっと多いだろうといわれています。認知症は若い方でもなります、20代、30代、40代、しかし自治体の取り組みは、認知症になった若い方たちの支援等が、すっぽり抜けている状態です。

認知症についてどんなイメージが今持たれているでしょうか、どうしても医療、介護の問題、トラブルが増えて、ご近所、家族、周囲、自治体も含めて負担が大きい、事故や消費者被害とか、本当にこれまでに想像もし

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市湊通丁南1丁目1-3　名城ビル3F
TEL･FAX 073-425-6459
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2017年7･8月号
2017年6月25日発行　第290号　（月300円）

目　次

地域と認知症フォーラムIN御坊
住み慣れたまちで安心して暮らしたい
基調講演「認知症とともに‥これからの生き方　支えあい方」
認知症介護研究・研修東京センター研究部長　永田久美子さん…… 1
理事長あいさつ …… 4
地域と認知症フォーラム第2部　パネルディスカッション①
人が人として当たり前に生きれる社会に
―熱く語られた希望の種『それいいね』の一言を行政が―…… 5

なかった事件が認知症絡みで起きています。虐待の問題もあります、認知症になって、それからも長い人生が続く、どう暮らしていけるのか、絶望感が強いというのが、従来のイメージだったと思います。この２０１７年の今、何が起きているのか。古い発想とかやり方のままで、認知症になったらおしまいで絶望だなあとか、認知症の問題点ばっかりを見てしまう、本人は社会のお荷物で、施設に預けちゃえば、もう近所も家族もいいよねみたいな、人任せのやり方が、かなり中心的になってるのが現状ではないかと思います。この同じ２０１７年のこの時期に、実は全く違う、１８０度違うぐらいの動きが出てきています。認知症になってからも決しておしまいではない、認知症になってから、その後の人生をどれだけ希望を持って生きていけるのか、認知症とともにもっと希望を持ちながら生きていける地域をつくろうという点です。人は死ぬまで可能性がある。もっと可能性をしっかりと重視するアプローチをしようと。最近では認知症の人が国の認知症の委員会に出席されるようになってきています。全国の各自治体で認知症の人を認知症施策の検討委員会に委員として招き入れて、本人の意見を元に、本当に役立つ施策をつくっていく、まさにこれからの社会づくりの大事な一員という、そんなやり方も生まれてきています。当然ですね、地域からのけ者にしたら、ちっとも問題は解決できない。いつまでも理解が広がらない、いつまでも具体的な支えが生まれない。地域で本人と一緒に、苦しみ、喜び、つくるという、地域で共にということがもうどんどんチャレンジされています。

発想、やり方を見直す パラダイムチェンジ

認知症の人へのこれからの取り組みで一番大事なのは、認知症があってもこれからの人生一緒に楽しもうという、そんなムードを大事にしていけるか、パラダイムチェンジというか、発想もやり方も大転換しながらの取り組みが今進みつつあります。２０００年に入ってから、もっと地域の中での暮らしを支えようという動きが始まりました。２０１０年ぐらいからは、本人が何を望むか、本人の意思を徹底的に大切にした、地域の中での継続的な支援をやっていこうというのが、今大きなうねりになってきています。御坊市長さんの言葉の中で、希望を持ちながら生きるという、最先端の思想を語っておられました。希望を持てるかどうかが、それ以降の人生の非常に状態像を大きく左右します。その最大の鍵が希望がない暮らしです。現状では、何もすることがなく、本当にその中で混乱を強めてる人が多い。本人自身がもっと希望を持って生きていくんだというね、そんなことが実際に取り組まれる時代になってきています。今、自治体がしっかりと発想やり方を切り替えていかないと、自分たちのまちで、50年前と同じぐらいな、非常につくられた障害を持った人を、増やしていってしまうことになってしまいます。今、一番足りないのは、発想ややり方の転換です

団塊の世代の方たちが今、続々と認知症になっておられます。今ですね、認知症になっても私は私、認知症を隠さずに外に出て、自分たちこそが体験してることを、勇気を振り絞って地域に伝えて、世の中の在り方や、医療、介護、いろいろなサービス、仕組みを変えていこうという、本人たちが今そうした活動を始めています。２０１４年、２年近くなりますけれども、日本認知症ワーキンググループというのが設立されました、これは認知症の本人だけがメンバーです。会議も、厚労省に意見を出すのも、本人たちで決めています。そんなことできるのかっていわれますが、認知症の人も、数年前までは会社員だった、数年前までは学校の先生だった、数年前まではコンビニの店長だったとか、そういうことは、ずっと長年やってきた方たちです。認知症の人のイメージを変えていくためにも、認知症とは、自分もこの先なるかもしれない、そこを一歩先に歩いている人というそんな見方が必要なんじゃないかなと思います。本人の言葉があります、「認知症になったら何も分からない、何もできないという偏見は、私たちの、私たち自身の生きる力を奪う」。

つながりの欠如が招く誤解と偏見、苦悩

この10年くらいで、国の内外で様々な研究・実践が積み上げられ、認知症はどんどん悪くなる一方というのは、非常に大きな偏見、誤解だということが明らかになってきました。今までの悪くなる一方というのは、つながりがない、周りの理解がない、家族も含めて地域の支援が不足しているために、障害が増幅されて、進行が早い、本人、家族が病気に加えて周りからの偏見で2重3重のダメージを受けて非常に苦しんでいる。つくられた障害で苦しんでいる人たちが非常に多かったし、まだ多くの地域では多いでしょう。本当はもっとより良く生きられる人たちなんだ、一部の人で抱え込むんじゃなくて、もっと地域ぐるみで発想を変えて、早い段階から、本人が状態を崩さない、本来持っている力を保って、いい状態でできるだけ地域で暮らし続けることをみんなでつくらなきゃ駄目なんだ、と私自身も大きな反省をしながら今取り組んでいます。どの市町村でもできることです、1人でも多くいい状態の人を地域で、和歌山でも増やしていきましょう。

地域の人の中には、専門職ではできない価値がいっぱいある。どんなに優秀な専門のお医者さんでも、この人がどんな人か知らなければ、本人の言葉を引き出せない、本人のその日の希望は引き出せない。本人が元気になって、本人が落ち着くには、地域の人たち、同じ生活、文化を共にしている、その地域の様子がよく分かり、できたら本人さんのことがよく分かる地域の人たちが一緒にいてくれることが、本人の会話を引き出し、本人のやる気を引き出し、本人の安定を引き出す。1人の人の暮らしに、医療と介護、住民さんが一緒に力を合わせて支えようという、そのアプローチがね、本当にまだまだこれからというところだと思います。いずれにしても、つながって支え合うというためには自治体の市区町村行政が果たす役割はこれまで以上に大きくなると思います。いろんな分野の人たちに、一緒の方向を向いて一緒にやろうということをやれるのは、本当に行政ならではの役割だと思います。

元気なときから、どうつながりを増やすかということ、認知症になったら隠さないで、お互い堂々と認知症の診断受けたんだって言おうねって。皆さんどうでしょうか、ご近所の方や自分のお友達や同級生に、自分が認知症になったら頼んだよって言いやすい仲間がどのぐらいいますか。認知症になってもお前はお前だ、これからもやっていくよって、そんなことを是非、元気なときから話し合って、変化が出始めたときも支え合う。中度、重度になったときほど、地域の人たち、仲間の力は大きいです。

（映像使用）この方は要介護度5です。建物の中にいると、うつらうつら寝たままになりがちですが、外に行くと生き生きされる。介護の職員と地域の人たちが話合いを重ねながら、災害が起きたときも認知症の人がパニックにならずに、避難できるように、それを地域が守るように、認知症の人たちとの避難訓練を重ねています。本人が残っている力を出して、活躍してもらおう。在宅で支えてるこの方は、発症してから16年目の人です。ご家族、ご近所、専門職が一緒に支えています。青いバッグの中に、家で使っているスプーンが入っています。なじんだスプーンだと口を開けて食べてくださる。特殊な装置ではなく、なじんだ食器、なじんだもので、なじんだ職員で支えていく。言葉が出なくても本人は声なき声のサインを出しておられます。家で暮らすだけが地域で暮らすことではない。地域の中で、自宅に代わるような居心地のいい場所をつくり、家でだけで家族に頑張らせないでも、家に代わる場所で堂々と伸び伸び暮らしていこう。要介護度3でも4でも5でも、自分のできることは自分でやる、体で持っている記憶は随分残る方が多いです。本人も恥ずかしがらずに消防や警察に行って、安心して外を歩き続けたいから見守ってほしい。いざ行方不明になったら、私、登録してるから、行方不明になってもちゃんと頼んだよっていうのを本人が言いに行ったりですね、幾つになってもまちには出ていこう。きれい事だけでなく、実際は毎日苦しいこと多い。だからこそ楽しいことを、苦しいことよりもいっぱいつくろうと。

特別養護老人ホームも今大きく変わる努力をね、積み重ねています。ある施設

開会あいさつ

和歌山県地域・自治体問題研究所理事長　鈴木裕範

皆さんこんにちは。今年の総会・シンポジウムは、ここ御坊市での開催になりました。地域に寄り添い、地域の中で学び、研究所として何ができるのかを考えていくことを目的に始めた、和歌山市以外での開催も3回目になります。

今年のシンポジウムのテーマは、2025年問題を目前に控えて関心を集める「認知症と地域」です。高齢社会・長寿社会のもとでだれもがなり得る認知症、本人、家族、地域そして行政はどのように向かい合うのか。御坊市は、認知症と介護福祉の分野で、行政と住民が一体になって全国的にもすぐれた取り組みをしている町です。「住み慣れたまちで安心して暮らしたい」、御坊モデルに学ぼうというのが目的です。

ところで、今年は、和歌山県地域・自治体問題研究所が1988年に和歌山の地に設立されて30周年になります。より良い地方自治、住民一人一人が主人公の、そういう地域社会の実現をめざして始まりましたが、この間を振り返ると地方がますます厳しい状況の中に追い込まれていく、30年であったと思います。

平成の大合併が地方に何をもたらしたか、の検証もまだ十分なされていません。その一方で、国の形が大きく変わろうとし、地方は容易に将来が展望できない。自治研が行動し、地域に提案していかなくてはならない問題がたくさんあります。自治の精神を大事にしながら、課題の一つひとつを共有し、一緒になって取り組んでいくことをお願いし、挨拶にさせていただきます。

では、学校帰りの子どもが施設に立ち寄って、お年寄りと過ごしています。最近はお年寄りの看取りをしています、そばに子どもたちがいてくれるだけで、最期の時の不安や苦痛が和らいで、あの世に旅立たれる方、子どもたちと一緒に最期を迎える方もね、増えています。どうすれば認知症になってからもより良く生きていけるか、大事なことはやっぱり、本人の声をちゃんと聞いていこうということです。本人の言葉を聞くことがこれからの施策の一番の種が見付かっていくというところです。

語りだした本人たち 脱領域のつながり社会

今、本人ミーティングという、認知症の本人同士が集まって思いっきりしゃべろうという、恥ずかしいとか思わないで、人生これから何して楽しめるか、何して自分なりにみんなの役に立てるか、前向きに自分たちが同士で話し合おうっていう、本人同士の話合いの場づくり少しずつ広がってきています。今年度は、厚生労働省の認知症施策の新しい動きの1つの目玉に、本人同士の話合いのミーティングを開こうというのが盛り込まれています。この本人ミーティングを是非すべての市町村で開いていこうなんて動きが出ています。後押しすれば、話してくれる人も出てくる時代になったと思います。

3番目のポイントは脱領域です。もう医療、介護とか、一部の人たちだけでやってる時代じゃない、あらゆる人たち、まちにいるすべての人たちが、もう無関係では決してない。つながる、ひたすらつながる。逆に全く関係ないと思われたような立場の人こそが、新しい解決力を生む、領域を越えたつながりが、新たな解決力を生んでいく。深刻だと誰も近寄ってこなので、楽しい企画を立てて、とにかくアクションミーティングやりながら、こんなことをやったらみんなが元気が出るんじゃないかなんて企画を立てて取り組んでみる。おもしろい取り組みがいくつも生まれています。認知症になってどう生きていけるのか、認知症になってからの生きる姿をしっかりと出していこうという点。それをいろんな人たちが支えてる。一人一人の認知症になってからの姿を市民に発信して、周りの人たちの協力の呼び水にしてるまちが、増えてきています。希望の種はすごく身近なところにあります。医療、介護はもちろんですけど、地域の様々な、防災、子育て、趣味のグループ、同級生の仲間とか、本当により良い暮らしをつくるためというのは、普通のまちの中にいっぱいある。市町村に住んでる人たちが、どれだけもっと人が当たり前に暮らしていけるように、当たり前の人と人のつながりをもっと育てていけるか。いろいろな地域のつながりが弱まりがちななか、地域の大きな再生を図っていく、そのチャンスが、認知症の人が増えるというとではないかと思います。御清聴ありがとうございました。

地域と認知症フォーラム第２部　パネルディスカッション❶

人が人として当たり前に生きれる社会に

―熱く語られた希望の種『それいいね』の一言を行政が―

和歌山県地域・自治体問題研究所主催の「地域と認知症フォーラム」が、「住み慣れたまちで安心して暮らしたい」をテーマに６月17日御坊市中央公民館で開催されました。

１部の記念講演の後、２部のパネルディスカッションを４人のパネリストと記念講演講師の永田久美子さんを助言者に迎え、金川めぐみさん（和歌山大学経済学部准教授）のコーディネートで進められました。４人のパネリストは、行政担当者と介護施設の責任者、ケアマネージャーで、それぞれ違う立場から、具体的な事例に基づき発言していただきました。なお、紙面の関係で、第２発言と会場質問は次号で掲載することにしています。

（編集部）

金川：第１部の基調講演で、永田先生のお話ですが、認知症の人たちを私たちはちゃんと見つめていますかというのが、最大のメッセージだと思います。２つ目に、先進的な事例だけではなく、ちょっとした気付きや、社会資源や、連携をもって、できることは多くあるということを学ばせていただいたと思います。

それをヒントに、御坊の取り組みや、広川町の取り組みを聞いて、どういうことができるのか一緒に学んでいければと思います。

パネリストの皆さんを御紹介します。まず、御坊市地域包括支援センター副主任の谷口泰之さんです。

次に、御坊市在宅介護支援センター藤田の志水建一さんです。

次に、認知症対応型デイサービスセンター「あがら花まる」の玉置哲也さんです。

４人目のパネリストが、広川町住民生活課地域包括支援センターの馬谷愛さんです。

そして、先ほど基調講演していただきました、認知症介護研究・研修東京センター研究部長の永田久美子先生が助言者です。

このメンバーでパネルディスカッションを進めさせていただきます。まずは、谷口さんから、お話をいただきます。

総活躍のまちづくりプロジェクト

谷口：私は、御坊市で、行政が取り組んでいることを報告させていただきます。永田先生も、おっしゃってましたけども、認知症の人を支えるって、支援者側の視点がすごく強かったと思うんです。これからは、認知症の人とともに、どうやって地域で暮らしていくかということが、求められる時代になってきていると思います。そのために行政ができることは何なのかということを考えて、我々は業務に携わってます。国が、認知症施策推進総合戦略＝通称「新オレンジプラン」という国家戦略を立てて、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを取り組み始めています。それを市町村が受けて、どういう取り組みができるかということを御坊市なりに考えてみたんです。介護福祉課だけではなく、企画課主導で、誰もが地域で活躍できるまちづくり「ごぼう総活躍のまちづくりプロジェクト」を昨年度から、５か年計画で実施しています。介護福祉課としては、認知症の方が地域で暮らしていくためにはどういう支援が必要なのかとか、本人さんがどういった暮らしをしたいのかという視点に立って、地域づくりに取り組んでいます。

谷口泰之さん

１つの事例ですが、皆様にお配りしているスターチスの花（御坊市は生産量日本一）を使って、こういうノベルティをつくったんです。スターチスの花言葉が、途絶えぬ記憶、変わらぬ心という、「認知症になっても、その人自身であることには変わりない」ということを伝えることに通じる花言葉だったので、そのすばらしい花言葉と、スターチスのPRも含めて、認知症の地

域づくりとスターチス農家とかがコラボレーションして取り組んでいます。これをつくったのも実は、認知症の方たちやデイサービスを利用されている方々なんです。初めはこの花も、スターチス農家の方が無償で事業所に持ってきてくれたんですけども、自分たちで収穫に行こうということになり、認知症の方たちも収穫に参加させていただきました。

また、ＪＡ青年部が結成したフラワーボーイズの方々が、「母の日参り」というイベントを考案して、母の日にスターチスの花束を配布してＰＲするんですが、スターチス農家の方も、夜なべをしながら花束をつくるのが大変なんやとおっしゃってたので、じゃあそれも認知症の方たちにやってもらおうということで、デイサービスで花束をつくっていただいて、２日ぐらいで５００束完成しました。ＪＡ青年部の方々も非常に喜んでくれました。

もう一つの事業は、今年２月に御坊認知症本人サミットといって、先ほど永田先生がおっしゃった本人ミーティングを開催しました。御本人さんが11名、遠くは大阪、兵庫、奈良からも御参加いただきました。その時、ハーモニカを吹かれた方がいたんです。認知症の一般的なイメージって、昔からやってる事とかはできると思うんですけど、この方は、数分前の記憶もないような方なんですが、70歳になってからハーモニカを始めたそうで、この場で『故郷』の曲を吹いて、皆さんで合唱しました。

もう一つ、ティッシュをお配りしていますが、これも認知症の方たちが、つくる作業をしてくださっています。御坊市も、地域づくりの啓発活動に貢献する取り組みをさせてもらっています。

最後に、「認知症患者」という言葉をよく耳にするんですが、我々は認知症の方たちを患者として接しているのではなく、飽くまで何々さんという地域の１人として接し、認知症の人と一緒に地域づくりをしていきたいと考えています。

金川：谷口さんのお話、ポイントが幾つかあったと思います。まずは、御坊で、総活躍のまちづくりプロジェクトという、まさに課を横断するような、連携の試みをされているということが１つ目。２つ目に、スターチスという有名な花を使いながら、認知症の方にできること、やりたいことを考えていただくという試みをしている。それから永田先生の紹介にもありました、本人サミットという試みをされている。その３つが、すごく面白いなと思いました。谷口さんの話を聞いて、御坊ってすばらしい行政マンがいるなあって、うれしく思いました。また、谷口さんの裏にはいろんな形でサポートしてくれる人がいるんだと思います。

次にケアマネージャーとしてのお立場から、志水さんよろしくお願いします。

認知症の方から始まった地域づくり

志水：地域での実践事例を紹介します。我々が取り組んだのは、「認知症の方から始まった地域づくり」です。平成28年の３月頃、御坊市の地域包括支援センターの谷口さんと同行訪問して、現在90歳の認知症のＮさんという男性と、介護してる86歳の奥さんと自宅で会いました。高齢夫婦世帯で、ほかに介護してくれる方はいらっしゃいません。当初は要介護１の認定でした。主介護者の奥さんから、「認知症であることを地域の方に知ってもらって、みんなに助けてもらいたい。」という力強い言葉を頂きました。３月に担当開始だったんですが、畑仕事をしながら近所付き合いもでき、気持ち良く過ごされていたので、無理に介護サービスを導入しませんでした。28年の10月頃に、畑で尻餅をついて腰を圧迫骨折して、寝たきりで閉じこもりになりました。そのあと、Ｂの症状（行動心理症状という、徘徊とか冒険）がちょっと出てきました。そのあと、行動心理症状と言われる徘徊、特に幻視が出てきました。

志水建一さん

当初は、アルツハイマー型認知症という診断を受けてたんですけども、様子を見てたら、動作がすごく緩慢だったのと、トイレに行かれたときに、水面に映ってる自分の顔が誰かに見えるとか、将棋の駒が散らばっているといって探し回るようになったんです。日高病院にある認知症疾患センターに相談して、確定診断受けたらレビー小体型認知症という診断を受けました。それまでアルツハイマー型認知症の薬を飲んでたんですけど、薬の内容も変更になりました。内服による治療に変更して、生活面において、何か改善できる点はないか奥さんと本人と話をしました。その結果、Ｎさんは昔から地域の方々に喜んでもらうことをするのが大好きな方だったというこ

とがわかりました。認知症になってから訪問者が減り、途絶えそうになっているつながりを、もう一度、以前のように、地域の方々が集まってくれて、話をしたり、畑に連れ出してくれたりできないかなと考えました。通院に同行した際に、３歳ぐらいの子供さんを見たときに、Ｎさんがはじけるような表情をしたんです。その表情を見たときに、この顔にしたいなという思いが強くなりました。

Ｎさんの話は一旦切らせてもらって、Ｎさんとつながりのあるもう１人の認知症の方を紹介します。Ｕさんという方です。Ｎさんの住んでいる地域に５年ほど前までむつみ会という会があり、そのリーダーをされていたのがＵさんの旦那さんです。旦那さんが他界されてからは、そのむつみ会の集まり自体がなくなったんです。Ｕさんはむつみ会にすごく尽力されていたんですが、夫が他界されたのと同時に、自宅を解体して、有料老人ホームに入居されたんです。僕の担当しているほかの御利用者様から「Ｕさん、旦那さんが他界してから交流することがなくなったし、サロンも近くにあるけども、２階にあるので上がれない」という情報を得ました。Ｕさんは入所して、家はなくなっているけども、帰ってくる場所はあるんじゃないかと考えました。去年の12月に地域の方に集まってくれるように、職員で65歳以上の方の家を一軒一軒回りました。そしたら地域の中で中心的になってくれる人が出てきまして、それは本当にええことやなあと言って、16名集めてくださったんです。私の方から集まった趣旨を話して、Ｎさんが認知症であることを主の介護者である奥さんから依頼され代弁させていただきました。

このときに、会の名前を何にしますかって言ったら、みんなが、５年ほど前にあったむつみ会を再結成しようということで、昔あった資源が、復活することになりました。認知症の方から始まる地域づくりの会ということで、御坊市が、総活躍プロジェクトを立ち上げていたこともあり、市のプロジェクトとマッチングしていきました。認知症になっても活躍できる場所があるということで、認知症の地域推進委員であったり、認知症初期集中支援チーム、御坊市における認知症コーディネーターとともに、Ｎさんの活躍に協力してくれました。むつみ会ができ、皆さんが集会所に集まって、Ｎさんと、Ｕさんが５年振りに再会できました。地域の方々も大歓迎してくれて、社会との接点を２人とも再び取り戻しました。昔からなじみの顔でつながったことで、昔話に花を咲かせて、我々専門職が知っているＮさんとはまた別の知らなかった表情がたくさん見られたんです。やっぱり、知ってる人たちが周りにいることで、出せる表情があるというのも実感できました。現在も毎月第３金曜日に集会所を開放し集まっています。地域の方たちが、Ｎさんの自宅に意識的に訪問して、話もしてくれるようになった結果、昼夜逆転がなくなったんです。Ｎさんの１日の活動も、今は朝６時に起きて、朝食ができるまで畑で草引きをして、お客さんが来たら、お話をする。地域の方、それも要介護１の方も、Ｎさんの家に来てくれるようになり、リハビリにもなってると思います。Ｎさんは今、日常生活の空間がリハビリとなって、生活されてます。このむつみ会を通じて、要介護認定を受けている方々が再開できたことで、介護保険サービスではなく、地域の交流で４人が新たに繋がりました。

これは10日前に撮った写真です。去年の10月まであんなに表情が固かったＮさんが、今、本当に表情が豊かになって、奥さんともよくしゃべるようになって、すごく楽しい日々を過ごされています。この写真を昨日奥さんに見せたときに、涙を流されたんです。そして家宝にしますとおっしゃってくれました。僕もそれを見た瞬間、ちょっと鳥肌が立って、僕たちってこういう役割をする仕事なんだなと本当に思った瞬間でした。

金川：ありがとうございます。スライドのＮさんの写真、すごくいい笑顔ですよね。永田先生が最初におっしゃってたことが、志水さんの実践報告の中で現れていたと思うんですよ。私はここにもすごいケアマネがいたって思いました。ケア

マネさんってケアプラン立てるだけではないんですよね。その方個人とか、奥さんとか、周囲の方を非常によく観察してるなと思ったんです。

次は、事業者として認知症の方を見てきた、玉置さんからの御報告になります。

事業所と地域とをつなげてもらった

玉置：管理者という立場上、人材育成や事業所の運営をやっていますが、現場が大好きで、御利用者さんと一緒に畑に行ったりしています。私から2点だけお伝えしたいと思います。永田先生の講演にもあったように、つながり、理解、支援ということを日頃から大事にして、実践するときに心がけています。10年前に「あがら花まる」ができたんですけど、初めは、認知症対応型という名称が付いてるが故に、あんなとこへ預けるんかわいそうやとか、あそこに行くともうおしまいやなあと言われたこともありました。初め来たときには、認知症について理解してもらいたいということで、いろんな地域の行事や集まりに参加したり、何かあったら出向くようにして、何とか住民の人たちとつながりを持つように心がけてきました。

玉置哲也さん

あとは認知症のサポーター養成講座を近くの小学校で、6年以上続けています。きっかけは、包括支援センターの保健師さんのお子さんが、その学校に通われていて、その保健師さんが学校側に提案してくれたことからです。初めは包括支援センターの方でその講座を開いてたんですけども、せっかく地域密着型の事業所が近くにあるんだからということで、やらせてもらうことになりました。初めは小学校の方でも、何で認知症のことをせなあかんのなという話が、あったようですけども、今は、総合学習という授業の中で、人権教育の一環として、認知症サポーター養成講座を開講させていただいています。ただ単に養成講座をやるのではなくて、そこに、よみきかせオヤジの会（絵本の読み聞かせをする団体）の方に認知症のことを分かりやすく紙芝居を読んでもらったりして、できる限り小学5年生のお子さんにも理解できるような内容で、実施しています。養成講座を受けた子供たちが、認知症のことを理解して、「あがら花まる」を利用している認知症の高齢者の皆さんに、自分たちに何ができるか学校の授業で考えて、利用者さんと一緒に交流をしてもらっています。この前、高校生のインターンシップで、うちの事業所に来てくれた方が、近くの小学校卒業したと言われてて、実は、養成講座がきっかけで、介護の仕事に興味を持ったということで、次世代の人材を育成できるすごくいい取り組みだなと思いました。サポーター養成講座を小学校で開講していると、子供が勉強してくるから、親御さんが、子供に聞かれたときに、ちゃんと答えれんかったら親として恥ずかしいと、お父さんお母さんたちも認知症について勉強するという相乗効果も生まれています。

次に、ある1人の利用者さんを通じて、事業所と地域とがつなげてもらった事例です。利用者さんの多くは、世話になりたくないというのが大半で、まだまだ役に立ちたいという思いを持っていらっしゃる方が大勢います。ある男性の利用者さんから、「わえ、山仕事得意やさか、できることないんか」という相談を受けました。毎年夏に流しそうめんをしていて、その竹を僕が切りに行ってたんですけども、一緒に切りに行きませんかとお話しすると、すごく乗ってくださったんです。近くに竹やぶないかと探してたところ、近所の人から「うちの竹やぶ行ってもうても構わんで」と言われたんですが、認知症の人に、刃物を使わせてもいいのかと疑問を持たれたみたいなので、その方の能力とかを把握した上で、同行させてもらうことを説明したんです。「じゃあ、わえも付いて行ったらよ」ということになり、その人も付いて行ってくれたんです。認知症の方がものすごい勢いで竹を切るから、近所の人が、認知症になっても、昔からやってたことは、ものすごくできることに感銘を受けたと言ってくださいました。その竹を使って、今年は初の試みで、近くの幼稚園児を招いて、一緒に流しそうめんをする予定です。自分がやった作業が、誰かの役に立つと、利用者さん自身もやりがいにつながりますし、そこに携わっている地域の人たちも、認知症になっても周りの支援や理解があったら、やりたいことを諦めなくて済むということを、ちょっとでも理解してもらえたのかなと思いました。

金川：ありがとうございました。玉置さんから、事業所の側から見た、本当に素敵なお話を頂きました。私

は2点、感じたんです。まずは、つながり、理解、支援という部分で、うまく連携されるなあと思いました。よみきかせオヤジの会という御坊で絵本の読み聞かせやってる、素敵なオヤジたちがいるんですよ。こういった人材と実にうまく連携しているというのが1点、あと子供たちに福祉を経験してもらう上手な実践があるなという点。和歌山県教育委員会では、かねてより「共育」というともに学び合うという意味の言葉をつかって子どもの育ちを説明しているんですね。認知症サポーター養成講座を受けた子供たちが教え、教え合う、共に学んで親たちとか周囲にも影響を与えるという「福祉共育」の好事例を見せていただいたなと感じます。

次は広川町の取り組みを馬谷さんから、お話をいただきます。

課を超え役場を超え地域の皆様と一緒に

馬谷：広川町の偉人濱口梧陵翁は、今から約１６０年ほど前に、安政の大地震が起こったときに、津波が起こると判断し、稲わらに火を付けて、村人を高台に誘導して、多くの命を助けました。そのあと、ふるさとの１００年先の安心と平和を願い、津波から村を守るための堤防の建設を企画し、その建設に私財を投じて、村から離れようとしている村人を雇用して、村の衰退を防いだといわれています。この梧陵翁の意を継ぎ、故郷を守るということを、「稲むらの火のまち創生総合戦略」の基本目標としてうたっています。そして、今年度から5年、10年後を見据えた福祉のまちづくり、認知症や障害のあることを隠さずオープンにすることが当たり前のまちづくりをしていこうと、今、プロジェクトを進めています。このプロジェクトは役場内の課を越えて、また役場という組織を越えて、地域の皆様と一緒に取り組んでいこうと計画しています。広川町がこのように取り組んでいくこととなったきっかけは、平成28年12月に発刊された『広報ひろがわ12月号』です。「認知症と家族のかたち」と題して、認知症について広く投げかけています。この広報は、ヤフーニュースで取り上げられ、全国、全世界に発信されました。マスコミでは、町の広報紙で認知症について、フルカラーで23ページも取り上げたのは前代未聞。それに加えて、企画から構成、編集までを1人の職員が行ったというのは驚きだという取り上げ方だったんです。この広報担当者が、取材なんかで常に言っていたことを紹介します。「この広報で多くの人に投げかけたのは、認知症は本人や家族だけの問題ではなくて、地域には支援者や応援者がたくさんいるし、認知症になっても、住み慣れた地域で、その人らしく暮らしていける、そんな地域となるための活動や支援者が存在するということを僕は言いたかったんです。」と熱く語っていました。この広報は、私たちとか、地域の事業所さんとか、地域で取り組みに賛同して活動している皆さんを後押しし、前に進めていくための追い風になっています。この広報誌をきっかけに広川町は、県内でも認知症施策で先進的に取り組みをされてる御坊市さんと交流する機会を持たせていただくことになりました。2月に御坊市で行われた認知症本人サミットでは、広川町から参加した認知症の御本人さんからも、改めて考えさせられることがありました。

Aさんは、前頭側頭型認知症に代表される認知症状があり、言葉の意味が分かりづらくて、御坊までの道中、「どこへ行くん、いつもの道と違うで、おかしいよ」と何度も繰り返されて、その都度、説明したんですけれども理解してもらえませんでした。Aさんは新しい環境に混乱する方だったので、初めて会う人が何十人もいる場所で、どう反応されるか不安でした。でも3時間程の間、いつもの口癖の「関係ない、帰ろう」と言うことなく、御主人さんのそばで穏やかに過ごされました。帰りの車では、「お父さん、何か分からんけど、今日は楽しかったなあ」と話してくれました。Aさんが、なぜ混乱されることなく過ごされたのか。私はその場にいらっしゃった皆さんが、認知症について正しく理解されていて、Aさんにとって、とっても居心地が良い場所だったからだと思っています。大げさかもしれないんですけれども、すべての人にとって居心地の良い環境というものが、目指すべきまちの縮図ではないかなあと思います。認知症についての理解が深まることで、居心地の良い場所となるのではないでしょうか。どうしていけば地域の皆さんの理解が深まるのか、課を越えて、組織を越えて、また市町村を越えて考えていきたいと思っています。また、理解

馬谷愛さん

を深めなければならないのは、認知症だけではありません。目指すところは、地域の皆さんが、それぞれ居心地が良いと感じる、福祉が充実したまちづくりだと考えています。

金川：ありがとうございました。さきほどのシンポジストの3人も大分「熱い人」なんですけれども、馬谷さんは秘めた熱さを感じるような御報告だったなと思います。居心地のいい場所をどうつくっていくか、すごく印象的なお言葉でした。それから、話題になった広報をつくった裏に、馬谷さんとか、いろんな人が認知症の取り組みで汗をかいている、そんな人がいたことを広報の人が、取材をされて感じ取ったんでしょうね。その意味ですごい広報誌をつくりだしたのはみんなの力かなというふうに感じました。

永田先生の方から、4人のパネリストの報告を踏まえて、これから認知症の地域づくりに取り組もうとお考えになっている市町村の方や事業所の方に、助言をお願いしたいと思います。

認知症の課題は人が生きていく権利の話

永田：4人の報告を聞いて非常に心を打たれています。共通していたのは、認知症とはという枠をつくらずに、素朴に何があったらいいのかなあということを愚直に考えられてる点が大事なんじゃないかなと思います。何があったらいいかなあという、素朴なところを入り口にすると、立場の違いを越えて、人としての大切なものとして、こんなのあったらいいなってことをつぶやくと、いろんな人たちに共通の願いが出てくる。4人の話聞いてたら、そのことを語ってらっしゃって、大事だなと思いました。結局こんなものあったらいいなというのは、人が生きていく権利の話ですよね。認知症の課題って煎じ詰めていけば、人が人として当たり前に暮らしていけるようにみんなで守っていけるかどうかということ。人が当たり前に暮らしていくためには、医療、介護も必要だけど、交通の足の便だとか、買物のこととか、通信、電話を通じて交流し続けられるとか、みんな必要になってくる。それが今までは分断されて、医療は医療、介護は介護、教育は教育ということになっていたけども、ようやく本人の声、家族の声とか、人の話を聞きながら、人が暮らしていくために必要な、人として当たり前に生きる権利を、みんなで再獲得しようということが始まってるんじゃないかなあと思います。私は、全国のいろんな地域でこういう熱い方がおられて、本当はこうあったらいいなとか、やりたいなってみんな思ってるんだけれども、人手や時間がないといった壁に立ちすくまざるを得ない人がいっぱいいて、1人だとなかなか一歩踏み出せない。一歩踏み出すのを後押ししてくれるのが、行政ではないかなって強く思います。特別の制度や計画がなくても、現場の人たちや当事者の人たちが、本当に素朴な生活のために必要で、それが人として大事だと思ったら、いいねって後押ししてくれるだけで、現場の人たちは、勇気を持って踏み出せる。ゼロ予算でもいい、まだ事業はなくてもいいけど、人としてそれが大事だと思ったら、「いいねそれは」とひと言、言ってくれる行政の人がいてくれるところが、ぐんぐん伸びてると思います。幾ら机の上で講座を何回受けても、言葉では分かってもピンとこないから、議員さんも、場合によっては首長さんも、みんな現場に出向いて、何が起きて、何が必要なのかを、専門職や現場の人や本人、家族の声を聞いてほしい。現場に行くことで動き始めて、つながり始めるんじゃないかなあと思ってます。

金川：永田先生のお言葉に私の特別な解説はいらないと思います。本当に長年、現場を見てこられた、すごく温かい励ましの言葉だったと思います。

内容の濃いシンポジウムでしたね。永田先生が、希望の種はごく身近なところにあると、レジュメにお書きになっていらっしゃいますが、正にそのとおりだと思います。皆さんは、自分ところの希望の種は何か考えていただいて、実践に移してしていただければと思います。最後に希望の種のヒントをいただいた4名のパネリストの皆さんと助言者の永田先生に、お礼の拍手を頂ければと思います。以上をもちましてパネルディスカッション「住み慣れたまちで安心して暮らしたい」を終了させていただきます。

永田久美子さん

金川めぐみさん